様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｈ０５６３２・１９Ｋ２０８３８

研究課題名（和文）縄文時代における日本列島とその周辺地域との関係性について

研究課題名（英文）Research on relationships between the Japanese archipelago and surrounding areas in the Jomon period

研究代表者
水ノ江　和同（MIZUNOE, KAZUTOMO）

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：１０８２４５６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：縄文時代における日本列島とその周辺地域、特に、朝鮮半島や極東ロシアとの関係性を明らかにするため、韓国とサハリンを訪問した。そして、縄文文化と関係性があるとされるけつ状耳飾・擦切石斧・結合式釣針について調査を行った。その結果、けつ状耳飾についてはある程度の関係性は確認できたが、その経路については不明であった。また、擦切石斧と結合式釣針については関係性を確認できなかった。これにより、日本列島の縄文文化は、周辺地域との関係性ごくわずかであり、基本的には独自に発展していったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一般的に日本文化の源流は、朝鮮半島から稲作農耕文化がもたらされた弥生時代からとされている。しかし、そのベースとなったのは弥生時代以前から存在した縄文文化である。そこで縄文時代の実情（ここでは日本列島とその周辺地域との関係性）を探ることにより、弥生時代に稲作農耕文化がもたらされた歴史的・文化的背景を明らかにして、現代社会がどのように形成されてきたかを考える機会とする。

研究成果の概要（英文）：I have visited Korea and Sakhalin to clarify the relationship between the Japanese archipelago and its surrounding areas during the Jomon period, especially the Korean Peninsula and the Russian Far East. Then, we investigated the ring-shaped earrings made of stone, the frayed and cut axes, and the combined hooks, which are considered to be related to the Jomon culture. As a result, a certain degree of relationship was confirmed for the ring-shaped earrings made of stone, but the route was unknown. Also, no relationship could be confirmed between the frayed and cut axes and the combined hook. As a result, it became clear that the Jomon culture of the Japanese archipelago had very little relation to the surrounding areas and basically developed independently.

研究分野：考古学

キーワード：縄文文化　日本列島　朝鮮半島　極東ロシア　けつ状耳飾　擦切石斧　結合式釣針

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本列島の縄文文化は、東アジアはもちろん、世界の新石器文化と比較しても極めて特異な個性を有する。傑出した遺跡数（約 94,000 遺跡）とその規模の大きさ（＝人口数）、膨大な量と多様性に富み造形的にも優れた器形と文様を有する縄文土器、土偶や石棒にみる高度な精神文化、ヒスイ製大珠や各種耳飾で表現される美しい装身文化は、世界の新石器文化においてはまったく類例のない縄文文化独自の特性である。

こういった独自性が極めて強い縄文文化の系譜や本質を解明しようとする場合、その出現 ・展開・終焉の要因を探ることが重要な研究課題となる。しかし、これまでは国内の膨大かつ多様な考古資料や遺跡情報に関する調査研究に終始したため、日本列島の周辺地域、特に極東ロシアや朝鮮半島の新石器文化との比較検討からそれを探ろうとする基礎的な研究が重要になるが、対象地が国外という事情もあり極東ロシアについてはほとんど進められてこなかった。

そうしたなか、近年ようやく、2006 年の國學院大學や 2014 年の東京大学において、北日本と極東ロシアとの当該期における関係性について追究の機運が出始めた。しかし、まだまだ局所的な研究であり、また年代的同時性や技術的な類似性の有無の追究も不十分であることから、今後に検討の余地を残している。

２．研究の目的

そこで本研究では、まず、縄文文化とその周辺の新石器文化との比較検討を通じた総合的な関係性の解明が不可欠と考える。特に、地理的に近い九州と朝鮮半島、北日本（北海道・北東北地域）と極東ロシア（サハリン・アムール川下流域）との関係性に焦点を当て、彼我の考古資料（土器・石製装身具・擦切石斧・骨角製漁撈具等）の分析を通じて、文化的な異同やその背景を追究する。これまで、この分野についての研究実績は極めて少ない。あっても、九州と朝鮮半島との関係性だけ、北日本と極東ロシアとの関係性だけといった、別々の観点で別々の研究が行われてきた。そこで、両者を同じ土俵に乗せて同じ価値観で比較検討し、周辺地域の新石器文化総体として日本列島の縄文文化と比較検討する研究を行うが、これは今回が初めての試みである。

こうすることで、世界の新石器文化はもちろん、近接した朝鮮半島や極東ロシアともまったく異なる文化を出現・展開させたのかを明らかにすることができると考えられる。このことは単に、縄文文化研究の領域に留まらず、稲作農耕技術を朝鮮半島から受け入れた、日本の基層文化ともされる弥生文化の生成要因を考えるうえでも、有益かつ説得的な説明をもたらすものと考えられる。

３．研究の方法

研究の具体的な方法・手順は以下のとおりである。

(1)北日本と極東ロシアの両地域において、関係性が想定されている外見的に類似した考古資料の抽出。

(2)なかでも、より強い関係性が想定されている石製装身具（玦状耳飾・環状石製品）・擦切石斧（擦切技法によって製作された石斧）・骨角製漁撈具（おもに結合式釣針）等を中心に、韓国とサハリンなどを訪問して当該資料の熟覧・実測・写真撮影等の調査を行う。そして、報告書の図面等では得ることのできない石材や製作技法に関する情報を重点的に収集する。

(3)北日本において対象となる考古資料についても、極東ロシアのそれとの比較検討という従来にない観点から、改めて熟覧・実測・写真撮影等の調査を行う。

(4)九州と朝鮮半島においては、最近 10 年間で新たな関係資料が多数出土している。したがって、それらに関する情報収集を進める。

(5)上記検討の成果に基づき、すでに得られている九州と朝鮮半島との関係性の在り方と、北日本と極東ロシアとの関係性の在り方について比較検討を行い、世界的に類例を見ない日本列島の全域に広がる縄文文化の本質についての解明を目指す。

４．研究成果

《韓国とロシアの訪問先と調査資料》

・国立慶州博物館（蔚珍厚浦里遺跡出土石斧）
・国立光州博物館（安島貝塚出土九州系遺物）
・釜山市立福泉博物館（韓国内出土玦状耳飾）
・ロシア科学アカデミー極東支部（チョールタビ・ヴァロータ洞窟出土品）
・極東国立大学（ボイスマン 2 貝塚出土品）
・サハリン連邦大学（スラブナヤ 4 遺跡出土品）
・サハリン州立郷土博物館（ナビリ 1 遺跡出土品）

《各考古資料の検討結果》

［玦状耳飾］

玦状耳飾（縄文時代早期末葉～中期中葉）については、まず日本列島内で出土するそれの総合的な編年研究がなかったため、245 点の玦状耳飾を対象に詳細な研究を行い、2019 年 9 月に「日本列島の玦状耳飾」として『考古学雑誌』第 102 巻第 1 号に発表した。その作業を進める中で、朝鮮半島と極東ロシアの玦状耳飾について現地調査を行った。

朝鮮半島の玦状耳飾はまだ 14 点と少ないが、中国東北部からの搬入品、九州からの搬入品、

朝鮮半島で独自に製作されたものの3種類が存在することが判明した。しかし、点数の少なさとヴァリエイションの少なさから、現時点で日本列島の玦状耳飾との系譜関係を詳細に追える状況には至っていない。

極東ロシアでは、これまでチョールタビ・ヴァロータ洞窟とボイスマン 2 貝塚から 1 点ずつ出土している。いずれも中国東北部からもたらされた古いタイプのもので、日本列島の玦状耳飾とは直接的な関係性はないことが明らかになった。

なお、ナビリ1遺跡の石製品は玦状耳飾か環状石製品か峻別が難しかった。

以上のことから、玦状耳飾については、日本列島に現時点で約2,000点が出土しているが、その系譜については少なくとも極東ロシアにはないことが明らかになった。では朝鮮半島かというと、それについてもまだ不明な点が多く、簡単に結論を出す状況にないことが確認できた。

［擦切石斧］

韓国の蔚珍厚浦里遺跡から出土した大型の擦切石斧については、秋田県の上掃遺跡の大型擦切石斧と類似していることから、その関係性が注目されてきた。今回の調査では、擦切石斧は白色の柔らかい蛇紋岩的な石材に限られ、擦切技法は石材の種類によって執られる技法であることが明らかになった。また、年代はこれまで土器の伴出がなかったことから不明であったが、伴出する管玉や篦状垂飾から韓国の新石器時代早期から前期に属するものであることが明らかになった。なお、これらの石斧はいずれも刃部が面取りされることや、まったくの未使用品であることから、いずれも実用品ではなく副葬専用に製作されたものであることも明らかになった。

極東ロシアにも擦切石斧は存在する。特に北海道に近いサハリン南部のスラブナヤ 4 遺跡から出土した擦切石斧については、すべて小型品に限られることが判明した。

日本列島には縄文時代早期中葉に北海道において擦切石斧が出現し、その後日本列島全体に縄文時代後期までに分布を広げると考えられている。今回の調査では、極東ロシアも朝鮮半島も日本列島の擦切石斧とは共通性が少なく、明確な系譜関係を押さえることはできなかった。

［結合式釣針］

これまで、九州と朝鮮半島の両地域には縄文時代早期末葉～前期に属する結合式釣針（軸部と針部を別々に製作して結合することで釣針の大型化を図る）が存在することから、両地域の関係性を示す重要な資料と考えられてきた。ところが、九州側で調査研究が進むと、九州の結合式釣針の所属時期は縄文時代後期初頭～前葉であることが判明した。したがって両者に系譜関係は存在しないことになった。

では、九州の結合式釣針はどこからやってきたのかが問題になり、縄文時代前期の東北北部や北陸の結合式釣針や、縄文時代早期末葉の東北北部に存在する結合式釣針が問題になった。そこで、極東ロシアに当該期の結合式釣針の存在が問題になり類似資料や関連資料の調査を現地で行ったが、残念ながら結合式釣針は存在しなかった。したがって、九州の結合式釣針の系譜はいまのところ不明である。

［総括］

日本列島の縄文時代を代表する考古資料のうち、その系譜が東アジアに求められるとされてきた玦状耳飾・擦切石斧・結合式釣針について、実際に朝鮮半島と極東ロシアを訪問して現地調査を行った。その結果、玦状耳飾については、年代的同時性や形態に類似性があり系譜関係は追えそうだが、擦切石斧については一見似ているが種類に大きな差があり直接的な系譜は追えそうにない。結合式釣針については、朝鮮半島のそれとは年代や形態が異なり系譜関係は追えず、極東ロシアには存在しなかったことから、その系譜を求めることはできなかった。

以上のことから、日本列島の縄文時代の考古資料の多くは、日本列島の周辺地域との関係性を見出すことが難しいというのが今回の調査研究の結論である。今後の資料増加によって若干状況の変化はあるかもしれないが、日本では年間 8,000 件、韓国では年間 900 件の発掘調査が行われ多くの成果が毎年確認されていることから、今後劇的に新しい成果・展開が望めない現状がある。したがって、日本列島以外に安易に系譜を求めるのではなく、今一度日本列島内の考古資料を再点検して、その系譜を探る必要があると考えられる。

［その他］

韓国では、石材同定を専門とする大坪志子氏（熊本大学埋蔵文化財調査センター准教授）にご同行いただき、韓国の研究者と意見交換を行った。また、ロシアでは当該地域の考古学事情に詳しい西脇対名夫氏（北海道教育委員会）に通訳を兼ねてご同行いただき、ロシアの研究者と意見交換を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 水ノ江和同	４．巻 101
２．論文標題 縄文文化は海を越えたか？-その範囲と境界の問題-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 考古学雑誌	６．最初と最後の頁 86　99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 水ノ江和同
２．発表標題 考古学と現代社会
３．学会等名 文化史学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考